第4回県立高等学校編成整備に関する懇話会概要

開催した会議の名称	第4回県立高等学校編成整備に関する懇話会
開催日時	平成23年5月24日（火）10：00～12：00
開催場所	（所在地）〒900-8571 沖縄県那覇市泉崎1丁目2番2号 （会場名）沖縄県庁12階第2会議室
出席者	委員　（懇話会会長）前泊委員 上地委員、北川委員、城間委員、宮城委員、 又吉委員、三村委員 事務局（総務課） 嘉数企画監、渡久山主任指導主事、桃原指導主事 （県立学校教育課） 山城班長、與那嶺班長 （義務教育課） 照屋主任指導主事
会議の公開・非公開	公開
傍聴者の人数	なし
会議の概要	1　開会 2　事務局説明 ①前回（第３回）懇話会の概要 ②（HP掲載予定）の確認 3　議題 【素案】のP12からP18の高等学校規模の適正規模、新しいタイプの学校に関して 各委員からの意見は下記のとおりである。 **＜主な論点＞** **高等学校規模の適正化について** ○過大規模校については志願者が多い、地域のニーズがあるという指摘があった。逆にその周辺学校では志願者が少ないという課題がある。過大規模校にとってはうれしいということもあるが、課題もある。 公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律（標準法）には、第5条に「公立の高等学校における学校規模は、本校にあっては240人(2学級（40人）×3学年)、分校にあっては政令で定める数を下らないもの」とある。（これは改正予定であり、改正されると1学年2学級に満たなくても本校・分校の決定は県に任されることとなる。） また、公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律施行令（分校の収容定員等）では、第1条公立高等学校

の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律第5条本文の政令で定める生徒の収容定員の数は、次の表の上覧に掲げる分校の区分に応じ、それぞれ同表の上欄に掲げる分校の区分に応じ、それぞれ同表の下欄に掲げる数とする。

分校の区分	生徒の収容定員の数
すべての学年の生徒を収容する分校	100人
前項に掲げる分校以外の分校	60人

さらに、「義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令」に「適正な学校規模の条件」第4条に「学級数が概ね12学級から18学級であること（学年では２学級か３学級）とある。

○普通高校と職業高校の生徒数と学校数の割合は、生徒数は６Pに普通高校は60％、専門高校は40％とある。学校数は18Pに全定併せて（普通科を置く学校は）37校である。

○保護者のアンケートでは普通科のニーズが８，９割だが、大学に行きたいから普通科とか、中学校ではまだ決まらないからとりあえず普通科というのが必ずいる。進路決定がだんだん遅くなっている。ドイツのマイスターではないが、ある意味、手に職を持ちたい、技を身につけたいという子どもに対して門戸を開いたときにこれが進路決定につながる。環境科や新しい学科等の突破口が見えてくるのではないか。

○普通科志向が多いということをどう受けとめて、その修正も含めて新しい高等学校をつくっていけるのか、進路決定を早めさせることができるか。文化観光スポーツ部ができる中で、もっと沖縄の特性を生かした学科の方向性を考える必要があるのではないか。

○高校への進学率が100％に近くなる中で、自分の生き方をしっかり押さえていない子どもが高校に通えるようになった。普通科が以前よりも（学力の）底辺層が広がっている。その状況下で普通科の在り方が問われている。

○専門高校にも、意識の高い進学を目指す生徒達もいるが、依然として学力が低くて、この学校にしか行けないという生徒もいる。この傾向は普通科高校でも同様である。

○専門高校でも、普通高校でも同じような課題を抱えて、以前よりも問題が複雑化している。志願者の多い学校にも悩みがある。学科内でも志願者が増えても同じような悩みがある。このことについては今後も検討していかないといけない。

○専門高校も大事だが、知識基盤社会の中でますます大学進学率が上がる。隣の韓国では80％、日本でも50％、沖縄でも40％でこれから上がっていくことを考えると普通科の整備をする必要がでてくる。

○国立高等専門学校は就職率は高いが（進路の）幅が狭い、普通科は医者、弁護士、研究者にもなれるし、幅が広いということは魅力がある。福祉科や環境学科の必要性があるのであれば、普通科を減らすのではなく、工業など専門高校の割合の部分を充てていけばよいのではないか。

○目的意識が低いというのは現場にいると感じるしその指導に悩んでいる。目的意識がはっきりしない中で高校に入ってきているということで、高校の三年間で生き方を考えさせ卒業の時には進路を決定させることができるような総合学科（第

	3の学科）が平成６年に沖水、陽明に導入され、その後嘉手納に導入された。 ○普通科は高等教育へのつなぎとして重要視されてきた。専門高校でも大学へ進学する生徒も増えてきた。教育の質が重視されてきている。 ○大規模化については、経済界の関係者としては原則としてはニーズというのは活かされるべきだ。普通科というのは進学科でもなくて、ユニバーサルということでよい。 普通科で対応できない子どもが多くなり、総合学科が出てきたかもしれないが基本的にニーズはどこにあるか、ニーズを大切にした方がよい。ただし、ニーズは父母が発している部分があるのでこのことは考える必要がある。 ○一般的に中学生の将来像は漠然としているものではないか。聞いた話だが、以外と工業高校出身者のすし屋など料理人も多いということである。ニーズはどのように解釈した方がいいのかは難しいところはある。 ○本人が見定めやすいように整備したほうがよい。ニーズがあるから、９割あるからといって合わせる必要はないと思う。こちら側で方向性を示してあげる必要がある。 ○地域の声、子供達の考え方を大事にした方がよいのではないかということだ。今の地域の声に答えるという考え方で、14Pの学科の定員の割合は、６：３：１と押さえたいという考えだ。 ○各学科の割合は、全国的もだいたいその通りで、実質は普通科：専門学科は７：３である。 ○保護者として（子どもを）入れたい学校ではなく、入れる学校になってしまっているのではないか。 平均的な義務教育段階での力のない、家庭学習もやらない、漢字が書けないなどの高校生が多くなってこのような生徒が最終的に退学しているのではないか。保護者のニーズに応えられる学校にして欲しい。 ○選び方が安易になっているように思う。高校三年間で将来の進路を決めきれない生徒が多い、大学に入っても何をしたいか分からない生徒も多い、夢を持たせるような学校にしてほしい。 ○P14③の「しかし、著しくニーズが低い専門学科が存在することについては、」という部分が気になる。平成23年度の入試で定員割れの激しい学校を上げてみると辺土名高校の環境科（本県にここにしかない）。北山校の理数科、陽明高校の介護福祉科、久米島高校の園芸科があげられる。 ○この学科は、どのような経緯でできたのか、少なくとも何が原因で今の状況になっているか分析する必要がある。その上でニーズに応えていく必要がある。 球陽高校の理数科でも毎年定員割れがある。これにも原因があって、普天間高校の普通科に生徒が流れているためである。球陽高校も普通科をそろえたら生徒は増えるだろう。 ○普通科と理数科がある学校では理数科の特色がない。普通科と理数科に何ら変化がない、理数科の特色を出す努力をする必要がある。 ○北山高校の理数科については、人口の少ない地域ではなおさら特色のない理数科よりは普通科を選ぶことになる。

	○理数科は、各地区の生徒に機会を与えるという趣旨で各地区ごとに設置されたと思う。ところが中身の問題で、理数科の科学教育の充実を図るなど特色を出す必要がある。普通科との競合の中で普通科が選ばれているという現状である。 ○校長も理数科の特色を出すために取り組んでもいるが、生徒は増えない現状がある。 地域の生徒がどのような学科を必要としているかなど全体として把握する必要があるのではないか。 ○生徒のニーズがあるかどうかや、指導者がいるかどうかもあるが、アイディアの問題だと思う。 将来的にどれぐらい仕事のニーズ、企業ニーズがあるか、受けいられるかまで考える必要があるのではないか。 ○普通科１クラスの学校は、辺土名高校の普通科、2クラスの学校は本部と北山、伊良部である。 10クラスはコザ、普天間、浦添、首里、小禄、那覇は11クラスだ。 大規模校は俗に言う伝統校である。その周辺には、定員割れの学校がある。 ○多すぎるからといって減らすとニーズに答えることにならない。 大規模の普通科の（学力が）底辺の部分の生徒は本当にこの学校でよかったのか検討すべきだ。11クラスあるとやはりいくつかの層に分かれると思う。（学力が）底辺の層の生徒は別の方向に向けてもいいのではないか。 ○（学力が）底辺だから普通科以外というのには賛成できない。全国的にも７クラス程度であるというのも聞いているので、これに近づけてもよいのではないか。これからの社会知識基盤社会であり２１世紀ビジョンにも語られていて、それを実現するための高校の配置でもある。 現状に迎合するのではなくコントロールするのも行政の役割である。 ○入口の問題ではく、就職率が100％など出口の問題だと思う。 生徒が進路を選択するとき学校でどのような資格が取れるかというのも魅力だ。目指すところはキャリア教育に集約される。 ○今の生徒はある意味職業意識は高いが、課題を与えてこれをやってみなさいというと続かないということがある。 ○魅力ある教育課程をどのようにつくっていくかが課題だと思う。京都の堀川高校は、底辺校であったが内容の充実でがらっと変わった。 ○1月末に中教審答申ではキャリア教育に言及し、普通科、総合学科などの問題点があげられていて、特に普通科のキャリア教育が課題になっている。 **新しいタイプの学校について** （事務局）・・・新しいタイプの学校について説明・・・ ○中退率が、平成11年３％から平成15年には２％に減っている。不登校の内容はどのようになっているか。受け皿として新しく学校をつくったときに生徒は挑戦する意欲はあるのか。

	○高校では、現在でも（不登校生徒を）受け入れている学校もあり、その生徒は入学後変容する。 中学校では、（不登校生徒は）減っている。 ○中学校では減って、高校では増えているとなると高校教育が問われる。中学校で不登校気味の生徒が高校で不登校となった生徒はどれぐらいいるのか。 ○セーフティネット的な学校という名称が気になる。子どもの側からすると、どのようなことをしたいからこの学校を選ぶということであるのでこの名称ではまずい。理由も心因性の子ども、遊び非行型の子どものために学校をつくりますという提案は、納得させられないのではないか。どのような目的の（明確な）施設をつくるかだと思う。 ○このような生徒の学校（不登校などの生徒が通う学校）ですと言って、はい行きますと、積極的に希望する生徒は少ないと思う。このような子ども達こそ普通の学校の中で守り育てた方がよいと思う。 ○10年ほど前のテレビ番組で、ある生徒が「わからない授業を一日中聞いて座っている私の気持ちが分かりますか」と言っていた。これから考えると、無理矢理勉強をさせるより別の道を考えさせるべきではないかと思った。 ○定時制・通信制を再編した学校はあってよいと思う。 ○セーフティーネット、学び直しの学校については、神奈川や埼玉にもある。今年度から開校している佐賀県の太良高校も参考にした。 ○職業的自立を図るという視点ではいいと思う。二次試験を落ちるような生徒は成人式で新聞報道されるようなことを起こしたりする。このような学校は必要である。中学校の不登校の生徒を不登校にならないようにするには、手厚い支援が必要である。
	4　連絡　次回懇話会は委員の希望日程を調整した結果、6月3日とします。 5　閉会
会議資料	資料　第3回県立高等学校編成整備に関する懇話会概要
問い合わせ先	担当課　沖縄県教育庁総務課教育企画班（渡久山・桃原） 電話　098-866-2705 FAX　098-866-2710